

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| 段落 | 文 | 頁 | 行 | 原文 | 神山訳 | 寺沢訳 |
|-----|---|-----|----------------------------|---|---|---|
| | | 138 | 25 | Anmerkung 2. | 註解 二 | 注解 二 |
| 401 | 1 | | 26 27 28 29 30 | In die Natur der Quantität, diese einfache Einheit der Discretion und der Continuität zu seyn, fällt der Streit oder die <i>Antinomie der unendlichen Theilbarkeit</i> des Raumes, der Zeit, der Materie u. s. f. | 分離と連続態とがこのように単純に〈統一していること〉である量の自然を帯びるものには、空間や時間、質料などの【無限な分割可能態】の抗争である【アンチノミー】がある。 | 空間・時間・物質等々の無限な分割可能性についての論争またはアンチノミーは、離散性と連続性とのこの単一な統一であるという・量の本性〔をどう理解するか〕に帰着する。 |
| 402 | 1 | 139 | 31 32 1 | Diese Antinomie besteht allein darin, daß die Discretion eben so sehr als die Continuität behauptet werden muß. | このアンチノミーの実質は、もっぱら次の点にある。すなわち、《分離は、連続態と同じ程度に主張されなければならない》という点である。 | このアンチノミーはもっぱら、離散性ならびに連続性がまさに同じように主張されなければならない、ということその本質としている。 |
| | 2 | | 1 2 3 4 5 | Die einseitige Behauptung der Discretion gibt das unendliche oder absolute <i>Getheiltseyn</i> , so mit ein Untheilbares zum Princip; die einseitige Behauptung der Continuität dagegen die unendliche <i>Theilbarkeit</i> . | 分離の片面的な主張は、無限に〈【分割されていること】〉なり絶対的に〈【分割されていること】〉なりを原理とするが、このことにより、〈分割できないもの〉を原理とする。これに対して、連続態の片面的な主張は、無限な【分割可能態】を原理とする。 | 離散性の片面的な主張は、無限なまたは絶対的な分割された存在を、したがって〔もはやそれ以上は〕分割不可能なものを原理とするものであり、これに反して連続性の片面的な主張は無限の分割可能性を原理とするものである。 |
| 403 | 1 | | 6 7 8 9 | Die Kantische Kritik der reinen Vernunft stellt bekanntlich vier (kosmologische) <i>Antinomien</i> auf, worunter die zweyte den <i>Gegensatz</i> betrifft, der die <i>Momente der Quantität</i> ausmacht. | カントの『純粹理性批判』は、周知のように、【四つの】（宇宙論的）【アンチノミー】を立てて、このうち【第二の】アンチノミーは、【量のモメント】をなす【対立】に該当する。 | カントの純粹理性の批判は、よく知られているように、四つの（宇宙論的）アンチノミーをあげており、そのなかの第二のアンチノミーが、量の契機をなしている対立にかかわっている。 |
| 404 | 1 | | 10 11 12 13 14 | Diese Kantischen Antinomien bleiben immer ein wichtiger Theil der kritischen Philosophie; sie sind es vornemlich, die den Sturz der vorhergehenden Metaphysik bewirkten, und als ein Hauptübergang in die neuere Philosophie angesehen werden können. | カントの立てたこれらのアンチノミーは、いつまでも批判哲学の重要な部分であり続ける。これらのアンチノミーは、とくに、先行する形而上学の瓦解を結果としてもたらしたもので、現代哲学への〈移行の核心〉とみなされてよいものである。 | これらのカントのアンチノミーは、ずっと批判哲学の重要な部分でありつづけているものである。それらはとくに先行の形而上学の挫折をひきおこしたものであり、また近世哲学への主要な移行とみなされることのできるものである。 |
| | 2 | | 14 15 16 17 | Bey ihrem grossen Verdienste aber ist ihre Darstellung sehr unvollkommen; theils in sich selbst gehindert und verschoben, theils schief in Ansehung ihres Resultats. | しかし、これらのアンチノミーにおおいな功績がある場合でも、それらの具現は、とても不完全である。それらの具現は、一つには、それ自身が妨げられ捻じ曲げられており、一つには、アンチノミーの帰結を考慮に入れると間違っている。 | しかしそれらの大きな功績にもかかわらず、それらの叙述はきわめて不完全である。すなわち、一方では、叙述そのもののうちに阻害と混乱があり、他方では、その結果に関してゆがみがある。 |
| | 3 | | 17 18 19 20 21 | Wegen ihrer Merkwürdigkeit verdienen sie eine genauere Kritik, die sowohl ihren Standpunkt und Methode näher beleuchten, als auch den Hauptpunkt, worauf es ankommt, von der unnützen Form, in die er hineingezwängt ist, befreien | これらのアンチノミーは、そこに胡散臭さがあるため、より厳密な批判を受けるに値する。この厳密な批判は、それらのアンチノミーの立場と方法をより詳細に照らしだすとともに、問題となる焦 | それらは注目に値するものであるから、それらを厳密に批判することはやりがいのあるものであり、そしてこの批判は、カントの批判の立場と方法をより立ちいって明らかにするとともに、ここ |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|---|---|--|---|
| | | 22 | wird. | 点を、それがおし込まれている無益な形式から解放するだろう。 | が重要だという主要点を、それが押しこめられている役にたため形式から解放するであろう。 |
| 405 | 1 | 23 24 25 26 | Zunächst bemerke ich, daß Kant seinen vier kosmologischen Antinomien durch das Eintheilungsprincip, das er von seinem Schema der Kategorien hernahm, einen Schein von Vollständigkeit geben wollte. | 私は、まず、次のことをコメントしておきたい。《カントは、カテゴリーについてのみずからの図式から取ってきた区分原理によって、みずからの四つの宇宙論的アンチノミーに完全性の〈見かけ〉を与えようとした》ということである。 | まずはじめにわたしは、カントがその四つの宇宙論的アンチノミーに、カテゴリーの彼の図式からとってきた区分原理によって、完全性の見せかけを与えようとした、ということを指摘しておく。 |
| | 2 | 26 27 28 29 30 | Allein die tiefere Einsicht in die antinomische oder wahrhafter, in die dialektische Natur der Vernunft faßt überhaupt jeden Begriff als Einheit entgegengesetzter Momente, denen man die Form antinomischer Behauptungen geben könnte. | しかしながら、理性にアンチノミーがある自然、いやより真なるかたちでいいかえれば、理性に弁証法がある自然をより深く洞察すれば、一般に、いかなる概念も、アンチノミーとなる主張の形式を与えるかもしれない対立したモメントの統一としてとらえられる。 | けれども理性のアンチノミー的な本性、あるいはいっそう真なる言い表わし方をすれば、理性の弁証法的本性をより深く洞察するならば、それぞれの概念が一般に対立した契機の統一として把握されるのであって、これらの契機に〔そうしたのならば〕アンチノミー的な主張という形式を与えることもできよう。 |
| | 3 | 31 32 140 1 2 | Werden, Daseyn u. s. f. und jeder andere Begriff könnte daher seine besondere Antinomie liefern, und also so viele Antinomien aufgestellt werden, als Begriffe aufgestellt werden. | そのことから、〈成ること〉や現存在など、また他のいかなる概念も、それがもつ特殊なアンチノミーを提供できるだろうし、したがって、概念を立てるのと同じくらい多くのアンチノミーを立てることができるのだろうが。 | だからして、成・定在等々が、またそれぞれの他の概念が、それぞれ自己のアンチノミーを提示することができようし、またしたがって概念が列挙されるのと同じ数のアンチノミーを列挙することができよう。 |
| 406 | 1 | 3 4 5 | Ferner hat Kant die Antinomie nicht in den Begriffen selbst, sondern in der schon <i>concreten Form</i> kosmologischer Bestimmungen aufgefaßt. | さらに、カントは、このアンチノミーを、概念それ自身のかたちではなく、むしろ、宇宙論的な諸規定というかなり【具体的な形式】のかたちで受け取って理解した。 | さらにカントは、アンチノミーを概念そのもののなかでではなく、宇宙論の規定というすでに具体的な形態のなかで把握した。 |
| | 2 | 5 6 7 8 9 10 11 12 13 | Um die Antinomie rein zu haben und sie in ihrem einfachen Begriffe zu behandeln, mußten die Denkbestimmungen nicht in ihrer Anwendung und Vermischung mit der Vorstellung der Welt, des Raums, der Zeit, der Materie u. s. f. genommen, sondern ohne diesen concreten Stoff, der keine Kraft noch Gewalt dabey hat, rein für sich betrachtet werden, indem sie allein das Wesen und den Grund der Antinomien ausmachen. | アンチノミーを純粋に持してその単純な概念で取り扱うためには、もろもろの思考規定を、世界という表象、空間や時間という表象、質料などという表象に適用したり、それらと混同したりせずに受け取って、むしろ、力も暴力も持たないそうした具体的な素材ぬきに、純粋にそれだけで独立して考察しなければならないだろうに。なぜなら、もろもろの思考規定は、ほかのものがなくとも、アンチノミーの本質と根拠をなすものだからである。 | だがアンチノミーを純粋にとらえて、それらをその単一な概念のうちで取り扱うためには、もろもろの思考規定を、世界・空間・時間・物質等々への適用やそれらの表象との混交のなかでとらえるのではなくて、アンチノミーの問題に関してなんの力量も権能ももっていないこれらの具体的素材〔と結びつけること〕なしに、純粋にそれだけで考察しなければならなかったのである。というわけは、もろもろの思考規定だけがアンチノミーの本質と根拠をなすものなのだからである。 |
| 407 | 1 | 14 15 16 17 | Kant gibt diesen Begriff von der Antinomie, daß sie "nicht sophistische Künsteleyen seyen, sondern Widersprüche, auf welche die Vernunft nothwendig <i>stossen</i> (nach Kantischem Ausdrucke) müsse;" -- was eine wich- | カントは、アンチノミーのそうした概念を次のように表している。アンチノミーは、「ソフィストの技巧ではなく、むしろ理性が必然的に（カントの表現によれば）つきあたらざるをえない矛 | カントはアンチノミーについて、それは「詭弁的なでっちあげではなくて、理性が必然的に（カントの表現によれば）つきあたらざるをえない矛 |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|----------------------------------|---|--|--|
| | | 18 | tige Ansicht ist. | トの表現によれば)【逢着せ】ざるをえない矛盾である。」 ¹ —これは、重要な見方である。 | 盾である」という概念を与えている—これは重要な見解である。 |
| | 2 | 18 19 20 21 | -- "Von dem natürlichen Scheine der Antinomien werde die Vernunft, wenn sie seinen Grund einsieht, zwar nicht mehr hintergegangen, aber immer noch getäuscht." | —「理性は、アンチノミーがもつ自然な〈見かけ〉の根拠を洞察すれば、たしかにその自然な〈見かけ〉ではもはや不意打ちされないとしても、それでもいぜんとして騙されてしまう」という。 | —「アンチノミーのもつ自然な見せかけの根拠を理性が洞察するならば、理性はもはやたしかにこの見せかけによって欺かれることはないが、しかしやはり相かわらず幻惑されることである。」 |
| | 3 | 21 22 23 24 25 26 | -- Die kritische Auflösung nemlich durch die sogenannte transcendente Idealität der Welt der Wahrnehmung hat kein anderes Resultat, als daß sie den sogenannten Widerstreit zu etwas subjectivem macht, worin er freylich noch immer derselbe Schein, d. h. so unaufgelöst bleibt als vorher. | —それを批判的に解消すること、すなわち知覚の世界がもついわゆる超越論的な観念性によって解消することは、いわゆる抗争なるものをなにか〈主観的なもの〉にする以外の帰結を持たない。この〈主観的なもの〉において、その抗争は、もちろんいぜんとして同じ〈見かけ〉のままであり続け、すなわち、以前と同じように解消しないままであり続ける。 | —〔そのわけは、〕知覚の世界のいわゆる先験的観念性による〔アンチノミーの〕批判的解消は、このいわゆる抗争をある主観的なものに変えるということ以外の成果をもたないのであり、この主観的なものなかでその見せかけはやはり相かわらず同じ見せかけでありつづける、つまり、以前と同様に解消されないままに残存しているからである。 |
| | 4 | 26 27 38 29 30 31 | Ihre wahrhafte Auflösung kann nur darin bestehen, daß zwey Bestimmungen, indem sie entgegengesetzt und demselben Begriffe nothwendig sind, nicht in ihrer Einseitigkeit, jede für sich, gelten kann ² , sondern daß sie ihre Wahrheit nur in ihrem Aufgehobenseyn haben. | アンチノミーを真に解消することの実質は、ひとえに次のことではしかありえないだろう。すなわち、《その二つの規定は、対立していて、同じ概念にとって必然的なものだから、それらの一面性のかたちでは、それぞれがそれだけで独立して通用しえない》ということであり、むしろ、《その二つの規定は、それらの真理を、もっぱらみずからが〔廃棄されていること〕のうちにか持たない》ということである。 | アンチノミーの真の解消は、ただ、二つの規定が対立しておりしかも同一の概念にとって必然的であるのだから、二つの規定のそれぞれが〔一つだけ〕切りはなされて、その一面性において成りたつことはできないのであり、それら二つの規定はそれらが揚棄されていることのみをその本質とするのである。 |
| 408 | 1 | 32 33 141 1 2 | Die Kantischen Antinomien näher betrachtet, enthalten nichts anders, als die ganz einfache kategorische Behauptung eines jeden der zwey entgegengesetzten Momente der Antinomie. | カントのアンチノミーは、詳しく考察するならば、アンチノミーがもつ対立した二つのモメントのそれぞれ一方のまったく単純な定言的な主張以外のものを含まない。 | カントのアンチノミーをよりくわしく考察するならば、それには、アンチノミーの対立する二つの契機のそれぞれ一方のまったく単一の断言的主張以外には何も含まれていない。 |
| | 2 | 2 3 4 5 6 | Aber dabey ist diese einfache kategorische oder eigentlich assertorische Behauptung in ein schiefes, verdrehtes Gerüste von Rasonnement eingehüllt, wodurch ein Schein von Beweisen hervorgebracht, und das bloß Assertorische der Behauptung versteckt und un- | しかし、この場合、こうした単純で定言的な主張、正確にいえば本来的に断言的な主張が、骨格の歪んでねじくれた理屈に包み込まれている。この理屈がなすべきことは、証明の〈見かけ〉を生み出して、その主張がたんなる断定にすぎないこ | けれどもその際に、この単一の断言的主張が、換言すれば、本来〔ただ〕事実をいう〔にすぎない〕主張が悟性的推理というゆがめられこじつけられた枠組みのなかに包みかくされている。こうすることによって〔カントは〕証明している |

¹カント『純粋理性批判』B 449. 引用は不正確であるが、「必然的に逢着せざるをえない」(nothwendig stoßen muß)は、そのまま引かれている。同箇所のカントの文章に従うかぎり、「ソフィストの技巧」は「ソフィストの命題」、「理性」は「人間の理性」、「矛盾」は「問題」とすべきところである。

²第2版とGWでは、「können」。

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|--|---|--|---|
| | | 7 8 | kenntlich gemacht werden soll; wie sich diß bey der nähern Betrachtung derselben zeigen wird. | とを隠し見分けにくいようにすることである。このことは、詳しく考察すれば、明瞭である。 | のだという見せかけをつくりだし、この主張がただ事実をいっているにすぎないということをおおいかくし、わからなくしてしまおうとしている。カントのアンチノミーをより詳しく考察すればわかるであろうように。 |
| 409 | 1 | 9 10 11 12 13 | Die Antinomie, die hieher gehört, betrifft die sogenannte <i>unendliche Theilbarkeit der Materie</i> , und beruht auf dem Gegensatze der Momente der Continuität und Discretion, welche der Begriff der Quantität in sich enthält. | 本節に関連するアンチノミーは、いわゆる【質料の無限な分割可能態】にかかわるものであり、連続と分離というモメントの対立に基づいている。量の概念は、これらのモメントを含んでいる。 | さて、ここでかかわりがあるアンチノミーは、物質のいわゆる無限な分割可能についてのそれであって、量の概念が自己のうちに含んでいる連続性および離散性という契機の対立に基づいている。 |
| 410 | 1 | 14 15 16 17 18 19 20 | Die <i>Thesis</i> derselben nach Kantischer Darstellung lautet so: <i>Eine jede zusammengesetzte Substanz in der Welt besteht aus einfachen Theilen, und es existirt überall nichts als das Einfache, oder was aus diesem zusammengesetzt ist.</i> | カントの具現によれば、このアンチノミーの【テーゼ】は、次のとおりである。 「世界にある合成された実体は、いずれも、単純な部分からできている。現実中存在するものは、単純なものか、それとも単純なものから合成されたものか、けっしてそれ以外にはない。」 ³ | カントの叙述にしたがえば、このアンチノミーの定立はつぎのように述べられる。 「世界におけるそれぞれの合成された実体は、すべて、単一な諸部分から成りたっている。そして、いかなる場合にも、単一なものか、あるいは単一なものから合成されたもの以外には、何ものも存在しない。」 |
| 411 | 1 | 21 22 23 24 | Es wird hier dem Einfachen, dem Atomen, das <i>Zusammengesetzte</i> gegenübergestellt, was gegen das Stätige oder Continuirliche eine sehr zurückstehende Bestimmung ist. | ここでは、〈単純なもの〉、すなわちアトム（原子）にたいし、〈【合成されたもの】〉が対置される。この〈合成されたもの〉というのは、〈切れ目なく続くもの〉や〈連続的なもの〉に比べると、かなり問題の残る規定である。 | ここでは単一なもの・すなわち原子に、合成されたものが対立させられているが、この合成されたもの〔という規定〕は、と切れていないもの・すなわち連続的なもの〔という規定〕にくらべて、はなはだしく劣った規定である。 |
| | 2 | 24 25 26 27 28 29 | -- Das Substrat, das diesen Abstractionen gegeben ist, nemlich empirische Substanzen in der Welt, was hier weiter nichts heißt, als die Dinge, wie sie sinnlich wahrnehmbar sind, hat auf das Antinomische selbst keinen Einfluß; es konnte eben so gut auch Raum und Zeit genommen werden. | —これらの抽象概念に与えられている基体は、詳しくいえば、世界における実経験的なもろもろの実体であって、ここでは、感性的に知覚できるような〈もの〉以上のなにごとにも言われていない。こうした基体は、〈アンチノミー的なもの〉それ自身になんの影響も及ぼさない。これと同様によく、空間や時間も、受け取られることがありえたのである。 | —これらの抽象的規定に〔その根底にあるものとして〕与えられている基体・すなわち世界における経験的実体とは、ここでは感性的に知覚可能な物を意味しているにすぎないのであり、こうした基体はアンチノミーをなすもの自体に対して何らの影響をもおよぼさない。〔その代りに〕空間や時間をとることもまったく同様に可能だったのである。 |
| | 3 | 29 30 31 | -- Indem nun die <i>Thesis</i> nur von <i>Zusammensetzung</i> statt von <i>Continuität</i> lautet, so ist sie eigentlich ein analytischer | —さて、このテーゼは、【連続態】のかわりにただ【合成】についてだけ述べているので、本来 | —さて、定立は連続性の代りに合成についてしか述べていないのであるから、定立は本来、分析的命題ないしは同語反復的である。 |

³ カント『純粋理性批判』B 462. 石川文康訳（筑摩書房、2014年）を参照。かならずしも従っていない部分がある。この場合、修正箇所をいちいち示さない。以下同様。

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|----|-----|----------------------|--|--|---|
| | 142 | 1 | oder <i>tavtologischer</i> Satz. | は、分析的な命題であり、というよりはむしろ、【トートロジー】の命題である。 | |
| 4 | | 1 2 3 4 | Daß das Zusammenge- setzte nicht an und für sich, sondern nur ein äusserlich Verknüpftes ist, und <i>aus Anderem besteht</i> , ist seine unmittelbare Bestimmung. | 《〈合成されたもの〉は、それ自体でもそれだけで独立してあるのではなく、ただ〈外面的に結びついたもの〉にすぎず、【〈他のもの〉からできている】》というのが、〈合成されたもの〉の直接的な規定である。 | 合成されたものが絶対的かつ自立的ではなくて、外的に結びつけられたものにすぎず、したがって他者から成りたっているということは、合成されたものの直接的な規定である。 |
| 5 | | 4 5 | -- Das Andre aber des Zusammengesetzten ist das Einfache. | —しかし、〈合成されたもの〉の〈他のもの〉とは、〈単純なもの〉である。 | —だが、合成されたものの他者とは単一なものである。 |
| 6 | | 5 6 7 | Es ist daher ein tavtologischer Satz, daß das Zusammengesetzte aus Ein- fachem besteht. | このことから、《〈合成されたもの〉が〈単純なもの〉からできている》というのは、トートロジーの命題である。 | だから、合成されたものは単一なものから成りたつということは、同語反復的な命題である。 |
| 7 | | 7 8 9 | -- Wenn einmal gefragt wird, <i>aus was Etwas bestehe</i> , so verlangt man ein <i>Ande- res</i> , dessen <i>Verbindung</i> jenes Etwas ausmache. | —ひとたび「【〈なにものか〉はなにからできているのか】」と問われるなら、その〈なにものか〉と【結合する】〈【他のもの】〉を求めることになる。 | —そもそも、或るものが何から成りたっているかと問われる場合には、ある他者の結合がかの或るものをつくりなしている、そういう他者が問い求められているのである。 |
| 8 | | 10 11 12 | Läßt man die Dinte wieder aus Dinte bestehen, so ist der Sinn der Frage nach dem Bestehen verfehlt, sie ist nicht beantwortet. | 《インクはインクからできている》と繰り返させるなら、〈なにからできているか〉への問いの趣旨を取り損なっており、この問いは、答えられていない。 | インクはインクから成り立っていると答えてそれでよしとするならば、成りたつということに関しての問いの意義はそこなわれ、この問いは答えられてはいないのである。 |
| 9 | | 12 13 14 | Die Frage ist denn allein noch, ob das, wovon die Rede ist, <i>aus etwas bestehen</i> soll, oder nicht. | 実際また、この問いは、《話題となっているものが、「【なにものからできている】」といわれているかどうか》というだけのものである。 | だが、そもそもまず問われるべきことは、話題になっているその当のものが何ものかから成りたっているべきなのか、そうではないのか、ということである。 |
| 10 | | 14 15 16 17 | Aber das Zusammengesetzte ist schlecht- hin ein solches, das nicht unmittelbar, nicht an und für sich, sondern ein vermitteltes, ein verbundenes ist, und aus anderem besteht. | しかし、〈合成されたもの〉は、端的に、直接的にあるものでも、それ自体でもそれだけで独立してあるものでもなく、〈媒介されたもの〉であり、すなわち〈結合されたもの〉であって、〈他のもの〉からできている。 | けれども、合成されたものとはとりもなおさず、直接的ではなく・かつ自立的ではなくて、媒介されたもの・結びつけられたものであり、したがって他者から成りたっているようなもののである。 |
| 11 | | 17 18 19 20 | Wenn es daher wieder aus Zu- sammengesetztem bestehen soll, so bleibt die Frage : aus was das Zusammengesetzte bestehe? vor wie nach; weil sie im Zusammengesetzten selbst liegt. | だから、その〈合成されたもの〉がふたたび〈合成されたもの〉からできているとされるのであれば、《その〈合成されたもの〉は、なにからできているのか》という問いがいぜんとして残る。なぜなら、問いは、その〈合成されたもの〉自身にあるからである。 | だからそれがふたたび合成されたものから成りたつとされるならば、合成されたものは何から成りたっているか、という問いは相変らず〔答えられないままで〕残っている。というのは、〔さきの答えのなかにでてきた〕合成されたものそのものなかに〔同じ〕問い〔を問わざるをえないゆえんのもの〕が含まれているからである。 |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|----|-----|--|---|--|
| | 12 | | 20 -- Wird das Ein- 21 fache, welches das Andre des Zusammengesetzten und 22 dasjenige, nach welchem gefragt wird, nur für ein <i>re-</i> 23 <i>lativ-einfaches</i> genommen, das für sich wieder zu- 24 sammengesetzt sey, so wird die Antwort wieder in jene: 25 daß die Dinte aus Dinte bestehe, verwandelt, und so- 26 mit die Frage nur wiederholt. | — 〈合成されたもの〉の〈他のもの〉である 〈単純なもの〉が、問われている当のものであつて、ただ、〈【相対的に単純なもの】〉—これはそれだけで独立するとふたたび合成されているものである—として受け取られるなら、答えは、ふたたび、先ほどのような《インクはインクからできている》という答えに変換される。このことによって、問いは、繰り返されるだけである。 | —合成されたものの他者であり、かつまた問い求められているゆえんのものでもある単一なものが、それ自身がふたたび合成されているであろうような相対的に単一なものと考えられるとすれば、答えはふたたび、インクはインクから成りたつ、というあの〔無意味な〕答えに転化してしまい、こうして〔同じ〕問いがただくり返されるにすぎない〔ことになる〕。 |
| | 13 | | 26 Der Vorstellung pflegt 27 nur diß oder jenes Zusammengesetzte vorzuschweben, von 28 dem auch diß oder jenes Etwas als <i>sein</i> Einfaches an- 29 gegeben würde, was etwa wieder für sich ein Zusam- 30 mengesetztes wäre. | 表象が常としているのは、あれこれの〈合成されたもの〉を念頭に浮かべることだけである。この〈合成されたもの〉についても、あれこれの〈なものか〉を〈【合成されたもの】〉がもつ〈単純なもの〉として跡づけるだろうし、この〈単純なもの〉も、おそらくふたたびそれだけで独立して〈合成されたもの〉であるだろう。 | 表象にとつては通常、あれこれの合成されたものが思い浮かべられているにすぎず、この合成されたものについてまたあれこれの或るものがその〔合成されたもの〕単一なものであると申し立てられるであろうが、しかしこの単一ものがいわばふたたびそれ自身合成されたものである〔といたぐあいである〕。 |
| | 14 | | 30 Aber es ist von dem <i>Zusammen-</i> 31 <i>gesetzten als solchem</i> die Rede. | しかし、話題になっているのは、【〈合成されたもの〉そのもの】なのである。 | だがいまここで問題にしているのは、合成されたものそのものである。 |
| | 15 | | 31 Es kann also 32 auch nicht wieder gefragt werden, aus was von neuem 33 das Einfache bestehe, das selbst ein Zusammengesetztes 34 sey; denn das Einfache ist nicht ein Zusammengesetztes, 35 sondern vielmehr das Andre des Zusammengesetzten. | したがって、《それ自身〈合成されたもの〉であるとされる〈単純なもの〉があらためてなからできているか》とふたたび問われさえしえない。というのも、〈単純なもの〉は、〈合成されたもの〉なのではなく、むしろそれ以上に、〈合成されたもの〉の〈他のもの〉だからである。 | したがって、それ自身が一つの合成されたものであるような単一のものについて、改めてそれが何から成りたっているかとくり返して問うことはできないのである。というのは、単一なものは合成されたものではなくて、むしろ合成されたものの他者なのであるから。 |
| 412 | 1 | 143 | 1 Was nun den Kantischen <i>Beweis</i> der Thesis 2 betrifft, so macht er, wie alle Kantischen Beweise der 3 übrigen antinomischen Sätze, den Umweg, der sich als 4 sehr überflüssig zeigen wird, <i>apagogisch</i> ⁴ zu seyn. | ところで、カントがテーゼの【証明】にあたるものについていえば、カントがそのほかのアンチノミーの命題を証明するすべてと同様に、カントは回り道をしているが、それは、【帰謬法】であるのにしてもまったく無駄なことが明瞭である。 | さて、この定立のカントの証明についていえば、その他のアンチノミーの諸命題のカントの証明のすべてと同様に、この証明は帰謬法的であるという廻り道をとるのであるが、この廻り道はまったくよけいなものであることが示されよう。 |
| 413 | 1 | | 5 "Nehmet an, <u>beginnt er</u> ⁵ , die zusammengesetzten 6 "Substanzen beständen nicht aus einfachen Theilen; so 7 "würde, wenn alle Zusammensetzung in Gedanken auf- | カントは、次のように始める。「合成された実体が単純な部分からならないと仮定してみよう。その場合、すべての合成が考えのなかで廃棄され | 「合成された実体が単一な諸部分から成りたっていない、と仮定せよ」と彼は〔証明を〕はじめる。「そうすると、すべての合成が思想のなかで |

⁴ apagogisch. Vgl. *PhB.* Bd. 354, S. 295. „Die Beweise §. 122. Sind entweder ostensive (directe) oder apagogische (indirecte).“ Vgl. Johann Heinrich Tieftrunk: *Grundriß der Logik.* Halle 1801. 312 f.

⁵ 二重下線部は、ヘーゲルの地の文。

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | |
|-----|---|---|---|--|
| | | 8 "gehoben würde, kein zusammengesetzter Theil und <u>da es</u> 9 " <u>(nach der so eben gemachten Annahme)</u> ⁶ <u>keine einfache</u> 10 " <u>Theile gibt</u> ⁷ , auch kein einfacher, mithin gar nichts 11 "übrig bleiben, folglich keine Substanz seyn gegeben 12 "worden." -- | ると、合成された部分も、また（〔たったいまなされた仮定によれば〕単純な部分がないのだから）単純な部分も残らず、したがってなにも残らないであろう。それゆえ、実体は与えられないであろう。」 ⁸ — | 廃棄されるならば、いかなる合成された部分も存在せず、また（いまさきにおこなった仮定によって）いかなる単一な部分も存在しないのであるから、単一な部分も、したがってまたまったく何ものも残存しないことになり、それゆえにいかなる実体も与えられていなかったことになるであろう。」 |
| 414 | 1 | 13 Diese Folgerung ist ganz richtig: wenn es nichts 14 als Zusammengesetztes gibt, und man denkt sich alles 15 Zusammengesetzte weg, so hat man gar nichts übrig; -- 16 man wird diß zugeben, aber dieser tautologische Ueber- 17 fluß konnte wegbleiben, und der Beweis sogleich mit 18 dem folgenden anfangen: 19 "Entweder ⁹ läßt sich unmöglich alle Zusammensetzung 20 "in Gedanken aufheben, oder es muß nach deren Auf- 21 "hebung etwas ohne alle Zusammensetzung bestehendes ¹⁰ , 22 "d. i. das Einfache, übrig bleiben." | この論証は、まったく正しい。〈合成されたもの〉だけがあるとして、それなのに、〈合成されたもの〉がすべてないと考えるとすれば、まったくなにも残っていない。このことは、認めざるをえないが、こうしたトートロジーの蛇足は、付け加えなくてもよかったし、証明は、すぐに次のように始めてよかった。 「すべての合成を考えのなかで廃棄することができないか、それとも合成が廃棄されたあとにも、合成されずに存立するなにかが—すなわち単純なものが—残るか、そのどちらかでなければならぬ。」 ¹¹ | この推論はまったく正しい。もしも合成されたもの以外に何ものも存在せず、そしてすべての合成されたものを取り除いて考えるならば、その場合にはまったく何ものも残らないことになる。—だれしもこのことを承認するだろうが、しかしこの同語反復的なよけいものは取り除くことができ、証明を直ちにつぎのように始めることができよう。 「すべての合成を思想のなかで廃棄することは不可能であるか、または、合成を廃棄したのちに、あらゆる合成なしに存立する或るもの・すなわち単一なものが残存しなければならないか、のどちらかである。」 |
| 415 | 1 | 23 "Im erstern Fall aber würde das Zusammengesetzte 24 "wiederum nicht aus Substanzen bestehen (<i>weil bey</i> 25 " <i>diesen die Zusammensetzung nur eine zu-</i> 26 " <i>fällige Relation der Substanzen *) ist, oh-</i> 144 1 " <i>ne welche diese als für sich beharrliche</i> 2 " <i>Wesen, bestehen müssen.</i>) | 「しかし、第一の場合は、合成されたものがふたたび複数の実体からなるということはないであろう（【なぜなら、複数の実体のもとで、合成は、たんに複数の実体の偶然的な関連にすぎないからである [*] 】。複数の実体は、この関連ぬきに、それだけで独立して恒常的な本質として存立しなければならない））。 | 「だが第一の場合には、合成されたものがふたたび諸実体から成りたつということはないであろう（というのは、これらのもの〔諸実体〕にあっては合成はたんに諸実体の偶然的な関係にすぎないのであり、諸実体の自立的に持続する本質として、偶然的関係なしに存立していなければならないからである）。 |
| | 2 | 2 214402-- Da nun dieser 3 "Fall der Voraussetzung widerspricht, so bleibt nur der 4 "zweyte übrig: daß nemlich das substantielle Zusammen- | —ところで、このケースは前提に矛盾するため、第二のケースのみが残される。すなわち、 | —ところがこの場合は前提に矛盾するから、第二の場合だけが残る。すなわち、世界における実 |

⁶ 二重下線部は、ヘーゲルの補足。

⁷ 下線部は、カントの原文では、括弧で囲まれている。

⁸ カント『純粋理性批判』B 462.

⁹ カントの原文では、次に „also“ が来る。

¹⁰ カントの原文では、大文字起こし。

¹¹ カント『純粋理性批判』B 462.

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|----------|---|--|---|---|--|
| | | 5 | "gesetzte in der Welt aus einfachen Theilen bestehe." | 世界のなかで実体的に合成されたものは、単純な部分からなる。」 ¹² | 体的な合成されたものは単一な諸部分から成りたっている。」 |
| 415 A | 1 | 143 27 28 29 30 | *) Zum Ueberfluß des Beweisen selbst kommt hier noch der Ueberfluß der Sprache, -- weil <i>bey diesen</i> (den Substanzen nämlich) die Zusammensetzung nur eine zufällige Relation <i>der Substanzen</i> ist. | *) ここでもやはり、次のような話しの蛇足は、証明の蛇足となっている。——なぜなら、【このもの】（すなわち複数の実体）【のところで】、合成は、たんに【複数の実体の】偶然的な関連にすぎないからである。 | *証明そのものがよけいなものを含んでいるうえに、ここではさらにおまけに、ことばがよけいなものを含んでいる——これらのもの（すなわち諸実体）にあっては合成はたんに諸実体の偶然的な関係にすぎないのであるから。〔傍点を付けたことばが重複だというのである〕。 |
| 416 | 1 | 144 6 7 8 | Derjenige Grund, welcher nebenher in eine Parenthese gelegt ist, ist in der That die Hauptsache, gegen welche alles bisherige völlig überflüssig ist. | 附随的に括弧書きされた理由（根拠）は、実際には主要事項であって、これに対して、これまで述べられたすべては、完全に蛇足である。 | ことをついでにかっこに入れてあるあの根拠が、実際には、これまでに述べられたすべてのことがそれに対してはまったくよけいなものになる主要な事柄である。 |
| | 2 | 8 9 10 | Das Dilemma ist dieses: Entweder ist das Zusammengesetzte das Bleibende, oder nicht, sondern das Einfache. | 次のことは、両刀論法になっている。《〈合成されたもの〉は、〈永続するもの〉であるか、そうでないかのいずれかであり、そうでないなら、むしろ、〈単純なもの〉が〈永続するもの〉である。》 | 〔ここで〕選択を迫られているのは、合成されたものは存続するものであるか、それともそうではなくて、単一なものがそうなのか、という選択である。 |
| | 3 | 10 11 12 13 14 15 | Wäre das erstere, nemlich das Zusammengesetzte das Bleibende, so wäre das Bleibende nicht die Substanzen, denn diesen ist die Zusammensetzung nur zufällige Relation; aber Substanzen sind das Bleibende, also sind sie einfach. | 第一のもの、すなわち〈合成されたもの〉が〈永続するもの〉であるとするなら、〈永続するもの〉は、複数の実体ではないだろう。というのも、〈合成すること〉は、複数の実体にとって、たんに偶然的な関連でしかないが、複数の実体は、〈永続するもの〉であり、したがって、単純であるからである。 | 前者すなわち合成されたものが存続するものであれば、存続するものは実体ではない。というのは、実体にとっては合成はたんに偶然的な関係にすぎないのだから。だが実体とは存続するものである、したがって実体は単一なものである。 |
| 417 | 1 | 16 17 18 19 20 21 22 | Es erhellt, daß ohne den apogogischen Umweg, an die Thesis: Die zusammengesetzte Substanz besteht aus einfachen Theilen, unmittelbar jener Grund als Beweis angeschlossen werden konnte, weil die Zusammensetzung bloß eine zufällige Relation der Substanzen ist, welche ihnen also äusserlich ist, und die Substanzen selbst nichts angeht. | 次のことが解明された。《帰謬法の回り道を経ずにすると、《合成された実体は単純な部分からできている》というテーゼの証明となる理由（根拠）は、そのテーゼに直接的に付け加えられてよかった。【なぜなら】〈合成すること〉は、たんに複数の実体の【偶然的な】関連でしかなく、したがって、この偶然的な関連は、複数の実体にとって外面的であり、複数の実体それ自身になんかかわらないからである。》 | 帰謬法的な廻り道をとることなしに、合成された実体は単一な諸部分から成りたつ、という定立に前述の根拠が証明として直接に結びつけられることができる、ということがわかる。なぜなら、合成とは諸実体のたんに偶然な関係にすぎず、したがって合成は諸実体にとって外的であり、諸実体そのものには何のかかわりもないのだから。 |

¹² カント『純粋理性批判』B462, 464.

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|-----|--|--|--|
| | 2 | | 22 -- Hat es mit der Zufälligkeit der Zu- 23 sammensetzung seine Richtigkeit, so ist das Wesen frey- 24 lich das Einfache. | —《〈合成すること〉が〈偶然であること〉》 に正しさがあるとすれば、本質は、もちろん単純 なものである。 | —合成が偶然的であるということが正しいなら ば、本質はたしかに単一なものである。 |
| | 3 | | 24 Diese Zufälligkeit aber, auf welche 25 es allein ankommt, wird nicht bewiesen, sondern gera- 26 dezu, und zwar im Vorbeygehen, in Parenthesi ¹³ ange- 27 nommen, als etwas das sich von selbst versteht oder eine 28 Nebensache ist. | しかし、こうした〈偶然であること〉は、まさに 問題となることで、証明されておらず、しかも片 手間に括弧書きで、じつに、自明ななにかとし て、あるいは副次事項として想定されたのであ る。 | しかし、これこそが重要なことなのだが、この偶 然性は証明されておらず、いきなり、なんとこと のついでに、かっこに入れて、自明のないしは副 次的な事柄として受け入れられている。 |
| | 4 | | 28 Es versteht sich zwar allerdings von 29 selbst, daß die Zusammensetzung die Bestimmung der Zu- 30 fälligkeit und Aeusserlichkeit ist; allein unter Zusammen- 31 setzung sollte die Continuität zu verstehen seyn, und diese 32 dann freylich nicht in einer Paranthese abgethan werden. | なるほど、《〈合成すること〉が偶然態や外面態 の規定であること》は、自明なことである。しか しながら、〈合成すること〉ということで連続態 が理解されるべきだったろうし、そうであればも ちろん、この連続態は、括弧書きであっさり片付 けられることではない。 | 合成が偶然性と外面性との規定であることはたし かに自明であろう。だが合成〔という表現〕のも とに連続性が理解されるべきであった、そしてそ のときには連続性はかっこのなかではけっして片 づけられるはずがないのだ。 |
| 418 | 1 | 145 | 1 In dem apogogischen Umwege sehen wir somit die 2 Behauptung selbst vorkommen, die aus ihm resultiren 3 soll. | こうして、帰謬法の回り道で我々が見るのは、 この回り道から帰結すべき主張そのものが見られ ることである。 | だから帰謬法的な廻り道のなかに、それから帰結 されるべき主張そのものが現われ出ていることが わかる。 |
| | 2 | | 3 Kürzer läßt sich der Beweis so fassen: | より簡単に、この証明は次のようにとらえられ る。 | すなわち、証明はより簡単につきのようにとらえ なおされる。 |
| | 3 | | 4 Man nehme an, die zusammengesetzten Substanzen 5 bestünden nicht aus einfachen Theilen. | 《合成されてしまった複数の実体は、単純な部 分からできていない》と想定してみよう。 | 合成された実体は単一な諸部分から成りたって いるのではない、と仮定しよう。 |
| | 4 | | 5 Nun aber kann 6 man alle Zusammensetzung in Gedanken aufheben, (denn 7 sie ist nur eine zufällige Relation;) also blieben nach de- 8 ren Aufhebung keine Substanzen übrig, wenn sie nicht 9 aus einfachen Theilen bestünden. | さて、〈合成すること〉のすべては、思考枠組み において廃棄することができる。（というのも、 〈合成すること〉は、たんに偶然的な関連にすぎ ないからである。）したがって、〈合成すること〉 を廃棄したあとには、実体が単純な部分から なるのでないとしたら、いかなる実体も残ってい ない。 | ところで、すべての合成を思想のなかで廃棄する ことができる、（というのは、合成はたんに偶然的 な関係にすぎないから）、したがって、もしも実体 が単一な諸部分から成りたっているものでなけれ ば、合成を廃棄したあとにはどのような実体も残 存しないことになる。 |
| | 5 | | 9 Substanzen aber müs- 10 sen wir haben, denn wir haben sie angenommen; es soll 11 uns nicht alles verschwinden, sondern Etwas übrig blei- 12 ben, denn wir haben ein solches Beharrliches, das wir 13 Substanz nannten, vorausgesetzt; diß Etwas muß also 14 einfach seyn. | しかしながら、我々は、複数の実体を持たざるを えない。というのも、我々は、複数の実体を想定 したからである。すべてが消えるはずはなく、 〈なにか〉が残っているはずである。という のも、我々は、実体と名づけるような〈恒常的な もの〉を前提としたからである。したがって、こ | けれども、われわれは実体〔が存在すること〕を 仮定したのであるから、われわれは実体をもっ ているにちがいない。われわれにとってすべての ものが消失すべきではなくて、なにかが残存 すべきである。というの、われわれが実体と名 づけたところの・持続するものをわれわれは前提 |

¹³ 第2版とGWでは、Parenthese.

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|--|---|---|--|
| | | | | うした〈なにか〉は、単純でなければならない。 | したのだからである。したがって、この〔持続する〕或るものは単一なものであらざるをえない。 |
| 419 | 1 | 15 16 17 18 19 20 21 | Es gehört noch zum Ganzen, den Schlußsatz zu betrachten; er lautet folgendermassen: "Hieraus folgt unmittelbar, daß die Dinge der Welt insgesamt einfache Wesen seyn, daß die Zusammensetzung nur ein äusserer Zustand derselben sey, und daß ¹⁴ die Vernunft die Elementarsubstanzen, als einfaches Wesen denken müsse." | 結論を考察することは、やはり、全体にとって欠かせない。結論は、次のとおりである。 「このことから直接に【論証される】のは以下の諸点である。すなわち、世界の物はいずれも単純な本質であるということ、【合成は単純な本質の外的な状態にすぎないということ】、また、理性は、複数の基礎的実体を、単純な本質として思考しなければならないこと。」 ¹⁵ | 〔この考察を〕まったからしめるためには、なお結論命題を考察することが必要である。それはつぎのように述べられている。 「このことから直接に、世界の物はおしなべて単一の存在物であること、合成は単一な存在物の外的状態にすぎないということ、理性は要素的諸実体を単一な存在物と考えざるをえないということ、が帰結される。」 |
| 420 | 1 | 22 23 24 25 | Hier sehen wir die Zufälligkeit der Zusammensetzung als Folge aufgeführt, nachdem sie vorher im Beweise parenthetisch eingeführt, und in ihm gebraucht worden war. | 我々は、ここで、〈合成すること〉の偶然態が【結論】として挙げられているのを見る。それも、この偶然態が、その前に証明において括弧で挿入され、証明で使われてしまったあとで、結論として挙げられるのである。 | ここにおれわれは合成の偶然性が帰結としてあげられているのをみるのであるが、〔なんとそれは〕この偶然性が証明のなかで前もってかっこに入れて導き入れられ、しかも証明のなかで使用されたのちになのである。 |
| 421 | 1 | 26 27 28 29 | Kant protestirt sehr, daß er bey den widerstreitenden Sätzen der Antinomie nicht Blendwerke suche, um etwa (wie man zu sagen pflege) einen Advocatenbeweis zu führen. | 《（よく言われるような）なにか弁護士流証明 ¹⁶ をするために、アンチノミーで抗争する命題でペテンをかけようとはしていない》と、カントはとくに抗議する ¹⁷ 。 | カントは、アンチノミーのたがいに抗争しあう両命題〔を証明する〕にあたって、いわば（世間でいう）三百代言的証明をやるために奇術のたねを求めているのではないといって、大いに抗弁している。 |
| | 2 | 29 30 1 2 3 | Der betrachtete Beweis ist nicht so sehr ein Blendwerks zu beschuldigen, als einer unnützen gequälten Geschrobenheit, die nur nöthig war, um die äussere Gestalt eines Beweises hervorzubringen, und es nicht in seiner ganzen Durchsichtigkeit zu lassen, daß das | 考察された証明は、ペテンが咎められるべきだというよりは、証明という外的な形態を生み出すためにひたすら必要だった役立つで苦し紛れのわざとらしさが咎めべきである。また、そのことが全体として見通しのきかないようにされてい | いま考察した証明は、たねのかくされている奇術というよりはむしろ、証明の外形をつくりだし・しかも帰結として出てくるべきものがかっこに入れて証明の要になっているということを明けすけに見せないようにするためにだけ必要だ |

¹⁴ daß 文以下は、大幅に省略されている部分がある。次のうち、下線部分が省略される。„daß, wenn wir die Elementarsubstanzen gleich niemals völlig aus diesem Zustande der Verbindung setzen und isoliren können, doch die Vernunft sie [sic. die Elementarsubstanzen] als die ersten Subjecte aller Composition und mithin vor derselben als einfache Wesen denken müsse.“

¹⁵ カント『純粹理性批判』B 464.

¹⁶ Advocatenbeweis の訳。ツィンマーマンは、「証明は、しばしばそれによってなされた濫用によって、〈ソフィストによる証明〉や〈デマゴグによる証明〉、〈弁護士による証明 Advokatenbeweis〉といわれる」とする。Vgl. F. J. Zimmermann, *Denklehre, zum Gebrauch bei Vorlesungen*, Freiburg 1832 (Google), S. 137. ウムブライトは、「見かけの証明 Scheinbeweis」の一つとして、「法律による (ad iudicium)」ものを挙げ、これが強制をことして「結論ありき Consequenzmacherei」だとし、これが「いわゆる〈弁護士による証明〉」と一致するとする。Vgl. August Ernst Umbreit, *System der Logik*, Heidelberg 1833 (Google), S. 115.

¹⁷ カント『純粹理性批判』B 458 参照。カントの原文は、次のとおり。„Ich habe bey diesen einander widerstreitenden Argumenten nicht Blendwercke gesucht, um etwa (wie man sagt) einen Advocatenbeweis zu führen, ...“

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|----------------------------------|---|---|---|
| | | 4 5 | was als Folgerung hervortreten sollte, in Parenthese der Angel des Beweises war. | る。だから、論証として出現すべきだったことが、証明の中軸となる括弧内にあるようなことになったのである。 | った・不必要で苦しまぎれの気どりである、と いってとがめられるべきものである。 |
| 422 | 1 | 6 7 8 9 10 | Die Antithesis lautet: <i>Kein zusammengesetztes Ding in der Welt besteht aus einfachen Theilen, und es existirt überall nichts Einfaches in derselben.</i> | 【アンチテーゼ】は、次のとおりである。 「世界における合成された物は単純な部分からならない。世界のどこにも単純な部分は存在しない。」 ¹⁸ | 反定立はこう述べられている。 世界におけるどのような合成された物も、単一な諸部分から成りたつてはいない。そして、いかなる場合にも、うちには単一なものはひとつも存在しない。 |
| 423 | 1 | 11 12 13 | Der Beweis ist gleichfalls apogogisch gewendet, und auf eine andere Weise eben so tadelhaft als der vorige. | 【証明】は、同様に、帰謬法で費やされるが、別のあり方で、前の証明と同じくらい非難すべきところがある。 | 証明は同じように帰謬法のやり方で進められており、そしてちがった仕方ではあるが、前の証明と同様に欠点のあるものである。 |
| 424 | 1 | 14 15 | "Setzet, <u>heißt es</u> ¹⁹ , ein zusammengesetztes Ding "(als Substanz) bestehe aus einfachen Theilen. | それは、次のようなものである。「合成された物（実体としての）が単純な部分からなるとしよう。 | すなわちこう述べている。「合成された物は（実体として）単一な諸部分から成りたつていとせよ。 |
| | 2 | 15 16 17 18 19 20 | Weil "alles äussere Verhältniß, mithin auch alle Zusammensetzung aus Substanzen nur im Raume möglich ist, so muß, aus so vielen Theilen das Zusammengesetzte besteht, aus so vielen Theilen auch der Raum bestehen, den es einnimmt. | そうすると、すべての【外的な関わり】、したがって複数の実体からの合成すべし【空間】においてのみ可能であるから、合成されたものは、それが占める空間が成り立つのとちょうど同じだけの部分からならなければならない。 | すべての外的関係は、したがって諸実体からのすべての合成もまた空間のなかでのみ可能であるからして、合成されたものが占めている空間もまた、合成されたものが成りたつてのとまったく同数の諸部分から成りたつていなければならない。 |
| | 3 | 20 21 | Nun besteht der Raum nicht "aus einfachen Theilen, sondern aus Räumen. | ところで、空間は単純な部分からはならず、複数の空間からなる。 | ところが空間は、単一な諸部分からではなく、諸空間から成りたつている。 |
| | 4 | 21 22 23 | Also "muß jeder Theil des Zusammengesetzten einen Raum "einnehmen." | それゆえ、合成されたもののどの部分も一つの空間を占める。」 | したがって、合成されたもののそれぞれの部分は、それぞれ一つの空間を占めざるをえない。」 |
| 425 | 1 | 24 25 | "Die schlechthin ersten Theile aber alles Zusammengesetzten sind einfach." | 「しかし、あらゆる合成されたものの端的に第一の部分は単純である。」 | 「ところで、すべての合成されたものの端的に最初の諸部分は単一なものである。」 |
| 426 | 1 | 26 | "Also nimmt das Einfache einen Raum ein." | 「ゆえに、単純なものは一つの空間を占める。」 | 「したがって、単一なものはそれぞれ一つの空間を占める。」 |
| 427 | 1 | 27 28 29 | "Da nun alles Reale, was einen Raum einnimmt, "ein ausserhalb einander befindliches Mannichfaltiges in "sich fasset, mithin zusammengesetzt ist, und zwar ²⁰ aus | 「ところで、空間を占める実在的なものはすべて、互い同士外部にある多様なものを内に含んでおり、したがって合成されている。しかも、 | 「さて、すべての実在的なものは一つの空間を占めており、それは相互外的に存在する多様なものを自己のうちに包みこんでいる、したがって合 |

¹⁸ カント『純粋理性批判』B 463.

¹⁹ 二重下線部は、ヘーゲルの地の文。

²⁰ zwar 以下は、次が省略されている。 „als ein reales Zusammengesetztes nicht aus Accidenzen (denn die können nicht ohne Substanz außer einander sein), mithin“

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|----------------------------------|--|--|---|
| | | 30 31 | "Substanzen, so würde das Einfache ein substantielles "Zusammengesetztes seyn. | 実体から合成されたものとして、である。それゆえ、単純なものは実体的に合成されたものということになるであろう。 | 成されたものである、しかも諸実体から合成されているのであるから、単一なものは実体的な合成されたものであることになろう。 |
| | 2 | 31 | Welches sich widerspricht." | これは矛盾している。」 ²¹ | これは自己矛盾である。」 |
| 428 | 1 | 147 | 1 Dieser Beweis kann ein ganzes <i>Nest</i> (um einen 2 sonst vorkommenden Kantischen Ausdruck zu gebrauchen) 3 von fehlerhaftem Verfahren genannt werden. | この証明は、（かつて見られたカントの表現を使わせてもらえば）誤りのある手続きの【巣窟】全体 ²² と呼ぶことができる。 | この証明は（他の所に出てくるカントの表現を使うならば）、欠陥のあるやり方の全巣窟とよぶことのできるものである。 |
| 429 | 1 | 4 5 | Zunächst ist die apogogische Wendung ein durchaus grundloser Schein. | いちばんはじめに、帰謬論の言いまわしは、まったく無根拠な〈見かけ〉である。 | まずはじめに、帰謬法的な言い廻しはまったく根拠のない見せかけである。 |
| | 2 | 5 6 7 8 9 10 | Denn die Annahme, daß <i>alles</i> <i>substanzielle räumlich sey, der Raum aber</i> <i>nicht aus einfachen Theilen bestehe</i> , ist eine directe Behauptung, die den unmittelbaren Grund des zu Beweisenden ausmacht und mit dem das ganze Beweisen fertig ist. | というのも、《【あらゆる実体的なものは空間的であるが、空間は単純な部分からなっていない】》 ²³ という想定は、ダイレクトな主張であって、こうしたダイレクトな主張は、〈証明されるべきもの〉の直接的な根拠をなすし、しかも、この〈証明されるべきもの〉によって〈証明すること〉全体がやりとげられるものである。 | というのは、すべての実体的なものは空間的であるが、空間は単一な諸部分から成りたつてはいないという仮定が、証明されるべきことの直接的な根拠をなしかつそれでもって証明の全体がおわってしまう直接的主張であるのだから。 |
| 430 | 1 | 11 12 13 14 | Alsdann fängt dieser apogogische Beweis mit dem Sätze an: "daß alle Zusammensetzung aus Substanzen, ein <i>äusseres</i> Verhältniß sey," vergißt ihn aber son- derbar genug, sogleich wieder. | つぎに、帰謬論によるこの証明は、「複数の実体からの合成すべては、【外的な】〈関わり〉である」という命題で始まるが、おかしなことに即座にまたこの命題をいやになるほどよく忘れる。 | つぎに、この帰謬法的証明は、「諸実体からのすべての合成は外的関係である」という命題ではじまるが、まったく奇妙なことにすぐこの命題を忘れてしまう。 |
| | 2 | 14 15 16 17 18 | Es wird nemlich fort- geschlossen, daß die Zusammensetzung nur im <i>Raume</i> möglich sey, der Raum bestehe aber nicht aus einfachen Theilen, das Reale, das einen Raum einnehme, sey mit- hin zusammengesetzt. | すなわち、次のように論証が進められる。《合成は、ただ【空間】でのみ可能であるが、空間は、単純な部分からはならず、空間を占める実在的なものは、したがって合成されている》 | すなわち、合成は空間においてのみ可能である、だが空間は単一な諸部分から成りたつてはおらず、一つの空間を占める実在的なものはしたがって合成されている、と推論が進められてゆく。 |
| | 3 | 18 19 20 21 22 23 | Da einmal die Zusammensetzung als ein <i>äusserliches</i> Verhältniß angenommen ist, so ist die Räumlichkeit, als in der allein die Zusammensetzung möglich seyn soll, eben darum selbst ein <i>äusserliches</i> Ver- hältniß, das die Substanzen nichts angeht, und ihre Natur nicht berührt, so wenig als das übrige, was man | ひとたび、合成が外面的な〈関わり〉であると想定されたのだから、もっぱら合成が可能であるはずの空間態は、まさにそれゆえにそれ自身、外面的な〈関わり〉である。こうした外面的な〈関わり〉は、空間態の規定からなおも結論づける残りのものと同様に、複数の実体とはなんのかかわ | ひとたび合成が外的関係であると仮定されたからには、合成がそのなかでだけ可能であるとされている空間性は、まさにそのゆえにそれ自身が外的関係であり、この外的関係は、空間性という規定からや |

²¹ カント『純粋理性批判』B 463.

²² カント『純粋理性批判』B 637. „Ich habe kurz vorher gesagt, daß in diesem kosmologischen Argumente sich ein ganzes Nest von dialektischen Anmaßungen verborgen halte, welches die transscendentale Kritik leicht entdecken und zerstören kann.“ (KdrV. B. 637) ここで、„vorher“とは、B 88 参照。„kurz“は、„vorher“を規定するのではないだろう。なお、„Nest“の表現は、『純粋理性批判』において、この一か所のみ。

²³ 第 424 段落第 2～3 文参照。

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|-----|----------------------------------|--|---|---|
| | | 24 | aus der Bestimmung der Räumlichkeit noch folgern kann. | りもないし、複数の実体の自然にも触れることがない。 | はり帰結されうるその他の関係と同様に、諸実体には何のかかわりもなく、またその本性にふれるものでもない。 |
| 431 | 1 | 25 26 27 28 29 30 | Ferner ist vorausgesetzt, daß der Raum, in den die Substanzen hier versetzt werden, nicht aus einfachen Theilen bestehe; weil er eine Anschauung, nemlich, nach Kantischer Bestimmung, eine Vorstellung, die nur durch einen einzigen Gegenstand gegeben werden könne, und kein discursiver Begriff sey. | さらに、次のことが前提とされる。すなわち、《ここで複数の実体に移し替えられる空間は、単純な部分からなっていない》。なぜなら、空間は、一つの直観であり、すなわち、カントの規定にしたがえば、たった一つの対象によってすら与えられる表象であり、議論にゆだねる概念でもないからである。 | さらにまた、ここ〔カントの証明〕で諸実体はそのなかに移し置かれている空間は、単一な諸部分から成りたっていないと前提されている。というのは、空間は直観である、すなわちカントの規定にしたがえば、唯一の対象によってのみ与えられることのできる表象であって、論証的概念ではないのだからである。 |
| | 2 | 30 31 32 | -- Bekanntlich hat sich aus dieser Kantischen Unterscheidung von Anschauung und Begriff viel Unfug mit dem Anschauen entwickelt, und um das Begreifen zu ersparen, ist der Werth und das Gebiet derselben ins Unendliche erweitert worden. | —周知のように、直観と概念とを区別するこうしたカントのやり方からは、〈直観すること〉にともなう多くのばかげたことが展開したし、〈概念的に把握すること〉を省くために、直観の価値と領域が無限に拡張した。 | —周知のように、直観と概念とのカントによるこの区別から直観作用をもってする多くの不当な議論が展開されたのであり、また概念的把握をなしですませるために、直観の価値と領域が無限に拡大されたのであった。 |
| | 148 | 1 2 | 1 2 | | |
| | 3 | 2 3 4 5 | Hier gehört nur, daß der Raum, wie auch die Anschauung selbst zugleich begriffen werden müsse; wenn man nemlich überhaupt begreifen will. | ここに欠かせないのは、《空間のみならず直観それ自身もまた、同時に概念的に把握されなければならない》ということである。すなわち、一般に概念的に把握しようとするなら、そうなのである。 | 〔だがこのような広汎な問題はいまここで述べるにふさわしくない〕。いまここでの問題に属するのは、空間・ならびにまた直観そのものも、ともに概念的に把握されなければならない、ということだけである。そもそも一般に概念的に把握することを欲するならば、〔上述のようでなければならないのである〕。 |
| | 4 | 5 6 7 8 9 10 | Damit entstünde die Frage, ob der Raum nicht, wenn er auch als Anschauung einfache Continuität wäre, nach seinem Begriffe als aus einfachen Theilen bestehend, gefaßt werden müsse, oder der Raum träte in dieselbe Antinomie ein, in welche nur die Substanz versetzt wurde. | それとともに発生するのは、次の問いであろう。すなわち、空間は、直観としては単純な連続態であるかもしれないし、その概念にしたがえば単純な部分からなるとしても、空間は、とらえられなければならないわけではないのではないか、という問いである。そうでなければ、空間は、ただ実体が置き換えられる先のアンチノミーに入り込むであろう。 | このことによって、直観としては空間は単一な連続性であるにしても、その概念に関しては空間は単一な諸部分から成りたつものとしてとらえられなければならないのではなからうか、という問題が生れるであろう、換言すれば、実体だけがおちいるとされていたその同一のアンチノミーに空間がはまりこむであろう。 |
| | 5 | 10 11 12 13 | In der That wenn die Antinomie abstract gefaßt wird, betrifft sie, wie erinnert, die Quantität überhaupt und somit Raum und Zeit eben so sehr. | 実際に、アンチノミーは、抽象的にとらえられるなら、想い起こせば、一般に量に該当し、また同程度に空間や時間に該当する。 | 実際に、このアンチノミーが抽象的に把握されるならば、すでに述べたように、それは量一般にあてはまるのであり、したがってまた空間と時間にもまさに同様にあてはまるのである。 |
| 432 | 1 | 14 15 16 | Weil aber einmal im Beweise angenommen ist, daß der Raum nicht aus einfachen Theilen bestehe, diß hätte Grund seyn sollen, das Einfache nicht in diß Element zu | しかし、証明では《空間は単純な部分からなるものではない》といったん想定されてしまっているのだから、このことが、《〈単純なもの〉の規 | だが、〔カントの〕証明においては、空間は単一な諸部分から成りたつてはいない、ということがひとたび仮定されたのであるから、このこと |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|-----|---|---|--|---|---|
| | | 17 18 | versetzen, welches der Bestimmung des Einfachen nicht angemessen ist. | 定に適合しないエレメントに〈単純なもの〉を移し替えない》理由であるはずなのに。 | が、単一なものという規定に適合しないこの境位〔すなわち空間〕のなかへと単一なものを移し置かない根拠とされるべきであったらう。 |
| 433 | 1 | 19 20 21 22 23 24 25 | In der Anmerkung zu dem Beweis der Antithesis wird noch ausdrücklich die sonstige Grundvorstellung der kritischen Philosophie herbeygebracht, daß wir von Körpern nur als <i>Erscheinungen</i> einen <i>Begriff</i> haben, als solche aber setzen sie den Raum, als die Bedingung der Möglichkeit aller äussern Erscheinung nothwendig voraus. | アンチテーゼの証明に対する註解において、いっそうはっきりと表明するかたちで、批判哲学がもついつもの根本表象も持ち出されてくる。すなわち、《我々は、諸物体について、ただ【諸現象】としてのみ一つの【概念】を持つ。しかし、諸現象は、そのものとして、すべての外的な現象の可能態の条件として、必然的に空間を前提とする》。 | 反定立の証明への注解のなかでは、われわれは現象としての物体についてのみ概念をもつが、物体は現象としては、あらゆる外的現象の可能性の制約としての空間を必然的に前提している、という批判哲学の別の根本観念がさらにはっきりともち出されている。 |
| | 2 | 25 26 27 28 29 | Wenn hiemit unter den Substanzen nur Körper gemeynt sind, wie wir sie sehen, fühlen, schmecken u. s. f., so ist von dem, was sie im <i>Denken</i> sind, eigentlich nicht die Rede; es handelt sich nur vom sinnlich Wahrgenommenen. | このようにして、物体を、我々が見たり感じたり味わったりなどするようにしてだけ、複数の実体のもとので思いつくのだとすると、〈【思考すること】〉のうちにある物体がなんであるかについては、本来、話題にならない。〈思考すること〉は、ただ感性的に〈知覚すること〉しか扱わないことになる。 | このようにして実体のもとに、われわれが見たり・触れたり・味わったり・等々するような物体だけが私念されているのだとすれば、実体が思考作用においてあるところのものについては元来語られてはいないのである。問題にされているのはただ、感性的に知覚されたものだけである。 |
| | 3 | 29 30 31 32 33 | Der Beweis der Antithesis war also kurz zu fassen: Die ganze Erfahrung unseres Sehens, Fühlens u. s. f. zeigt uns nur Zusammengesetztes; auch die besten Mikroskope und die feinsten Messer haben uns noch auf nichts einfaches <i>stoßen</i> lassen. | したがって、アンチテーゼの証明は、次のように簡潔にとらえることができた。《我々が見たり、感じたりするなどの経験全体は、我々に、ただ〈合成されたもの〉しか示さない。》最良の顕微鏡によっても最鋭利な刃物によっても、やはり、我々が〈単純なもの〉に逢着することはない。 | したがって、反定立の証明は簡単につきのように述べられるべきであった。すなわち、われわれの視覚作用・触覚作用等々の全経験はわれわれに合成されたものだけを示す、もっとも良い顕微鏡やもっとも鋭利なメスでさえも、われわれをある単一なものに出あわせたことはいまだかつてなかった。 |
| | 4 | 149 1 2 | Also soll auch die Vernunft nicht auf etwas einfaches <i>stoßen</i> wollen. | だから、理性もまた、なにか〈単純なもの〉に逢着しようとするべきではない。 | したがって理性もまた、単一な或るものに出あわそうなどと欲すべきではない、と。 |
| 434 | 1 | 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 | Wenn wir also den Gegensatz dieser Thesis und Antithesis genauer betrachten, und ihre Beweise von allem unnützen Ueberfluß und Verschrobenheit befreyen, so enthält der Beweis der Antithesis, -- durch die Versetzung der Substanzen in den Raum, -- die assertorische Annahme der <i>Continuität</i> , so wie der Beweis der Thesis, -- durch die Annahme der Zusammensetzung, als der Art der Beziehung des Substantiellen, -- die assertorische Annahme der <i>Zufälligkeit dieser Beziehung</i> , und damit der <i>absoluten Eins</i> . | したがって、我々が、こうしたテーゼとアンチテーゼの対立を厳密に考察し、それらの証明を、無益にして余計なことやひねくれたことから解放するならば、アンチテーゼの証明は、—諸実体を空間に移すことによって—【連続態】を断定的に想定することを含んでおり、テーゼの証明は、—実体的なものとの関係のあり方である合成の想定によって—【この関係の偶然性】とこのことによる【もろもろの絶対的な一つ】を断定的に想定することを含んでいる。 | したがって、この定立と反定立との対立をいっそう厳密に考察して、それらの証明をあらゆる無益なよけいものやねじくれから解放するならば、反定立の証明は—諸実体を空間のうちに移し置くことによって—連続性をただ事実として述べるにすぎない仮定を含んでおり、同様に定立の証明は—合成を実体的なものとの関係の仕方と仮定することによって—この関係の偶然性を・またそれとともに絶対的なもろもろの一をただ事実として述べるにすぎない仮定を含んでいる。 |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | |
|-----|----------------------------------|--|--|--|
| 2 | 12 13 14 15 | Die ganze Antinomie reducirt sich also auf die Trennung und directe Behauptung der beyden Momente der Quantität, insofern sie getrennt sind. | だから、アンチノミー全体は、量をもつ二つのモメントが分断されている以上、その二つのモメントの分断とダイレクトな主張に還元される。 | したがってアンチノミーの全体は、量の二つの契機の分離と、そしてこれらの契機が分離されている限りでの、これらの契機の直接的主張とに帰着する。 |
| 3 | 15 16 17 | Nach der bloßen Discretion genommen, sind die Substanz, Materie, Raum, Zeit u. s. f. schlechthin getheilt, das Eins ist ihr Princip. | 実体や質料、空間や時間などは、たんなる分離にしたがって受け取るならば、端的に分割されているのであり、〈一つ〉がその原理となっている。 | たんなる離散性にしたがってとらえるならば、実体・物質・空間・時間等々は、端的に分たれており、一がそれらの原理である。 |
| 4 | 17 18 19 20 21 | Nach der Continuität ist dieses Eins nur ein aufgehobenes; das Theil bleibt Theilbarkeit, es bleibt die Möglichkeit zu theilen, als Möglichkeit, ohne wirklich auf das Atome zu kommen. | こうした〈一つ〉は、連続態に照らせば、たんに廃棄されたものにすぎない。分割することは、分割可能態のままであり、現実的にはアトムにならない可能態として、分割する【可能態】のままである。 | 連続性からすれば、この一は揚棄された一にすぎない。分割作用は分割可能性にとどまっており、現実には原子にまで到達することのない可能性として、分割できるという可能性にとどまっている。 |
| 5 | 21 22 23 24 25 26 | -- So aber enthält die Continuität selbst das Moment des Atomen; so wie jenes Getheiltseyn allen Unterschied der Eins aufgehoben hat, -- denn die einfachen Eins ist eines was andere ist, -- somit eben so ihre absolute Gleichheit und damit ihre Continuität enthält. | —しかし、それだから、連続それ自身は、アトムをモメントを含むのである。それは、先ほどの分割されていることが、もろもろの〈一つ〉がもつ区別すべてを廃棄してしまうし—というのも、単純な〈一つ〉は、他の〈一つ〉であるものと一つだからである—、まさに、このことによつて絶対的な同等態を含み、またこれにより連続を含んだのと同様である。 | だがこうして、連続性自身が原子〔である〕という契機を含んでおり、同様にまた、あの分割されている存在はもろもろの一のあらゆる区別を揚棄してしまっている—というのは単一な一は他のもろもろの一があるところのものと同一であるから—こうしてまたまさに、それら〔もろもろの一〕の絶対的な相等性と・またそれとともにそれらの連続性を含んでいる。 |
| 6 | 26 27 28 29 30 | Indem jede der beyden entgegengesetzten Seiten an ihr selbst ihre andere enthält, und keine ohne die andere gedacht werden kann, so folgt daraus, daß keine dieser Bestimmungen, allein genommen, Wahrheit hat, sondern nur ihre Einheit. | 二つの対立した側面のそれぞれが、みづから自身のもとにみづからの他の側面を含むのであるし、そのいずれもが、他の側面なしに考えることができないのだから、このことから結論づけられるのは、《これらの規定のいずれもが、それだけで受け取られると、真理を持たない》ということ、むしろ《ただそれらの統一のみが真理をもつこと》である。 | 二つの対立する側面のおのおのは、それ自身のもとに〔顕在的に〕それの他の側面を含んでおり、どの側面も他方の側面なしに考えることができないのであるから、このことから、これら〔二つの〕規定のいずれも、それだけが単独にとらえられるならば、真理態をもっておらず、ただそれらの統一だけが真理態をもっている、ということが帰結されるのである。 |
| 7 | 30 31 32 | Diß ist die wahrhafte dialektische Betrachtung derselben, so wie das wahrhafte Resultat. | このことが、二つの側面の真なる弁証法的な考察であつて、真なる帰結なのである。 | このことが、これらの規定の真の弁証法的考察であり、また、真の成果である。 |
| 435 | 1 150 | 33 Unendlich sinnreicher und tiefer, als die betrachtete 34 Kantische Antinomie sind die dialektischen Beyspiele der 1 alten <i>eleatischen Schule</i> , besonders die Bewegung 2 betreffend, die sich gleichfalls auf den Begriff der Quantität gründen, und in ihm ihre Auflösung haben. 3 | 考察したカントのアンチノミーよりも無限により感性豊かでより深いのが、【古代エレア派】がとくに運動にかかわつて提出した弁証法の諸例である。この諸例は、同時に、量の概念に基礎をもち、この概念においてみづから解消するものである。 | 古代エレア派の弁証法の実例・とくに運動に関してのそれは、これもまた量の概念に基づき、かつこの概念のうちにその解決をもつものであるが、いま考察したカントのアンチノミーよりも、限りなく意味が豊かでありかつ深い。 |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | |
|-----|--|---|--|--|
| 2 | 3 4 5 6 7 | Es würde zu weitläufig seyn, sie hier noch zu betrachten; sie gehören näher zu den Begriffen von Raum und Zeit, und sind bey diesen und in der Geschichte der Philosophie abzuhandeln. | この諸例をここでさらに考察することは、きわめて冗漫であろう。この諸例は、詳しくみると、空間と時間の概念に属するものであるし、この概念のところでも哲学の歴史においても論じられるべきことである。 | しかしここでこれらの実例を考察することは、あまりにも遠くまで行きすぎることになる。これらの実例は空間と時間との概念により密接に属するものである。だから、これらの概念を取り扱う際に、また哲学史において論及されるべきである。 |
| 3 | 7 8 9 10 11 | Sie machen der Vernunft ihrer Erfinder die höchste Ehre; sie haben das reine Seyn des Parmenides zum <i>Resultate</i> , indem sie die Auflösung alles bestimmten Seyns in sich selbst aufzeigen, und sind somit an ihnen selbst das <i>Fliessen</i> des Heraklit. | この諸例は、その発明家の理性にとって最高の名誉となるものである。この諸例は、規定されたあらゆる存在をみずから自身において指摘することによって、パルメニデスの《純粋な存在》をその【帰結】とし、これとともに、その例それ自身のものでヘラクレイトスの〈【流転】〉の例となる。 | それらはその発見者の理性に最高の栄誉を与えるものであり、またそれらは、あらゆる規定された存在の解消を自己自身のうちに提示することによって、パルメニデスの純粋存在を成果としてもち、かつそれとともに、それら自身のもので〔顕在的に〕ヘラクレイトスの流転である。 |
| 4 | 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 | Sie sind darum auch einer gründlichern Betrachtung würdig, als der gewöhnlichen Erklärung, daß es eben Sophisten seyen; welche Assertion sich an die Wahrnehmung nach dem, dem gemeinen Menschenverstande so einleuchtenden, Vorgange des Diogenes hält, der, als ein Dialectiker den Widerspruch, den die Bewegung enthält, aufzeigte, seine Vernunft weiter nicht angestrengt haben, sondern durch ein stummes Hin- und Hergehen auf den Augenschein verwiesen haben soll, -- eine Assertion und Widerlegung, die freylich leichter zu machen ist, als ihre wahrhafte Erkenntniß und Auflösung, die eine Einsicht in die dialektische Natur der Begriffe voraussetzt. | それゆえ、この諸例は、《それは詭弁である》という通常の説明よりも根柢的な考察ともなる。ディオゲネスの先例は、知覚のもとで普遍的な人間悟性（常識）にしたがえばきわめて明白なかたちで、その詭弁を断言してみせている。ある弁証論者が運動に含まれる矛盾を指摘したときに、ディオゲネスは、みずからの理性をそれ以上あまり働かせずに、むしろ、無言で行きつ戻りつすることである。——断言と反駁は、詭弁の——概念が持つ弁証法の自然への洞察を前提とする——真の認識と解消よりも、おそらくやりやすい。 | だからしてそれは、そんなものはまさに詭弁だとする通常の説明よりも、はるかに根本的な考察に値するものでもある。そんなものは詭弁だとする断言は、常識にとってのきわめて明白なディオゲネスの前例にしたがって、知覚に依拠している。すなわちディオゲネスは、ある弁証法論者が運動の含む矛盾を述べたときに、彼の理性をさらに緊張させたりしないで、〔このとおり運動できるのではないかと〕だまってあちこち歩きまわることによって、目でみてたしかめるようにと〔相手を〕うながしたといわれている。——だが、断言的な肯定とか反駁とかは、概念の弁証法的本性への洞察を前提しているそれらの問題の真の認識および解決よりも、たしかにずっと容易にやれることなのである。 |
| 436 | 1 24 25 26 27 | Die Kantische Auflösung der Antinomie besteht allein darin, daß die Vernunft die <i>sinnliche Wahrnehmung nicht überfliegen</i> und die Erscheinung, wie sie ist, nehmen solle. | アンチノミーをカントのように解消することの実質は、もっぱら次の点にある。すなわち、理性は、【感性的な知覚】を【飛び越す】べきではなく、現象をそのあるがままに受け取るべきである、という点である。 | アンチノミーのカントによる解決は、ただ、理性は感性的知覚をとびこえるべきではなく、現象があるがままにとらえるべきだ、ということにあるにすぎない。 |
| | 2 27 28 29 30 | Diese Auflösung läßt den Inhalt der Antinomie selbst auf der Seite liegen, sie erreicht die Natur des Begriffes nicht, der wesentlich die Einheit entgegengesetzter ist, deren jedes, für sich isolirt, nichtig und | こうした解消は、アンチノミーの内容そのものを脇に置くものであり、本質的には対立するものの統一である概念がもつ自然には届かない。この統一がもつそれぞれは、それだけで孤立すれば、空 | この解決は、アンチノミーそのものの内容をわきへおしのけ、概念の本性をわがものとしていない。概念は、本質的に、対立したものの統一であり、この対立したもののおのおのは、それだけが |

ヘーゲル『論理学』初版（1812年）401段落～436段落

| | | | | | |
|--|--|----------------------|--|--|---|
| | | 31 32 33 34 | <p>an ihm selbst nur das Uebergehen in sein Anderes ist, wie hier die Quantität diese Einheit und darin die Wahrheit der beyden die Antinomie ausmachenden Bestimmungen ist.</p> | <p>無であり、みずから自身のもとでみずからの〈他のもの〉への移行にすぎないのである。それは、この場の議論で、量がこうした統一であり、またこうした統一のなかに、アンチノミーをなす二つの規定の真理があるのと同様である。</p> | <p>孤立させられるならば、空虚であり、それ自身のもとで〔顕在的に〕その他者へと移行する運動にすぎない。〔概念の本性は〕いまここでは量〔の概念〕が、アンチノミーを構成している二つの規定のこうした統一であって、この統一のなかでのみ両規定の真理態である〔が、ちょうどその〕ように〔とらえられるべきである〕。</p> |
|--|--|----------------------|--|--|---|

平成 27 年度跡見学園女子大学特別研究助成費による成果の一部 (Ver.1, 2017/8/9. Copyright© KAMIYAMA, Nobuhiro)